

とうしん
東晋・4世紀／おうぎし
王羲之 (303? ~ 361?)

(教科書 26 ~ 29 ページ)



概要・特徴

王羲之^{せきとく}の尺牘^{せきとく}（手紙）29通を集めた法帖^{ほうじょう}（古人の書の名跡を石や木に模刻して拓本^{もこく}を採り、折本^{おりほん}に仕立てたもの）。楷書の1通を除き、全て草書で記されている。古くから「書中の龍」とも称されてきた、草書の典型である。1通目の書き出しが「十七日先書」であることから全体を「十七帖」とよぶが、29通それぞれにも帖名がつけられている。教科書に掲載の部分は、始めの3行が1通目の「^{ちし ばじょう}都司馬帖」、続く4行が2通目の「^{いつみんじょう}逸民帖」、後ろ3行が3通目の「^{りゅう ぼじょう}龍保帖」である。多くは蜀^{しよく}（現在の四川省）の長官であった周撫^{しゅう ぶ}に宛てて書かれたものと推定され、自身の近況報告や、相手を気遣う内容が記されている。

「十七帖」にはいくつかの刻本が伝わるが、教科書に掲載の拓本は、筆の運びがわかりやすく、温和で柔らかい書風である。文字の骨格がしっかりとしており、線の太細^{たいさい}の変化がアクセントになっている。

作者について

王羲之^{ろう やりん ぎ} (303? ~ 361?) は、東晋の官僚。琅邪臨沂^{さんとう}（現在の山東省）の名門貴族の出身で、不安定な政治情勢の中、官途を歩んだ。草・行・楷の各書体において類いまれな才能を発揮し、その書は後世、多くの人々に規範として尊重され、「^{しよせい}書聖」とたたえられた。現在、その真跡^{しんせき}は全て失われ、拓本や臨模が見られるのみである。

草書の成立・時代背景

草書は、前漢^{ぜんかん}の時代に、篆書や隸書の速書きとして生まれた。手紙など日常で用いられたが、貴族文化が花開いた東晋時代には、王羲之によってその書法が芸術の域にまで高められた。

唐^{とう}の第2代皇帝・太宗^{たいそう}は、王羲之の書を愛し、広く収集したことで知られているが、「十七帖」も太宗が集めた王羲之の書を編集したもので、弘文館^{こうぶんかん}（官立の学問所）で学生が学ぶ手本としていたことがうかがえる。